

大窯

15世紀後半、美濃では大窯が出現した。穴窯よりも大規模な窯で、壁やドーム型の屋根を地上に残して半分だけ埋められていた。そのため、焼成室を大きくすることができ、側面には扉を付けて出し入れを容易にすることができた。

大窯が使われるようになる頃には、窯に関する他の技術も進歩していた。小さな煙を分ける柱が複数あり、温度管理がしやすく、焼成の成功率が高くなった。また、焼成室内には石を敷いて保温性を高め、火室と焼成室の間には小さな昇炎壁を設けて、未焼成の作品を置くための平らな面を作っていた。

もう一つの重要な技術的变化は、陶工が焼成の進捗状況を確認できるように、蓋付きの覗き穴を設けたことだ。美濃では、この穴は焼成の途中で作品を取り出すのにも使われた。陶工たちは、赤熱した作品を取り出して水に浸していた。この急冷が釉薬を「瀬戸黒」と呼ばれる深い黒色に変化させる。途中で作品を取り出して普通に焼くことで、一度の焼成で異なる色の作品を作ることができたのである。